

主 題：サイン：神のことばと神からの励まし
 聖書箇所：詩篇 119篇49-56節

先週の月曜日（20日）と火曜日（21日）、私は宮城県と岩手県にいました。3月11日の震災以来、それぞれの地域で被災した方々を助ける働きを行なっている教会を訪ねました。そこで働きをされておられる先生方、また、実際に被災者の皆さんに様々な助けを与える働きをしておられる皆さん、彼らの話を聞きながら、また、岩手にある津波によって被災した一つの町を訪問させていただいて、そこで見た様々な光景を思うときに、私は一つの確信をもって帰って来ました。それは、このように非常に大きな困難を抱えておられる皆さんにとって今一番必要で最も重要なこと、私たちが考えなければいけない、与えなければいけない事柄は何かということです。それは水や食べ物ではありません。避難所におられる方たちに仮設住宅が必要だということでもありません。事実、経済的、物質的な必要でもありません。その必要とは「希望」です。

ここにおられる皆さんもきっと何らかの形でこのことを理解することができるのではないかと思います。私たちはみな大なり小なり、どこかでもう抜け出すことができないうような困難を抱えたことがあるはずで、先が全く見えない状況の中で、自分はどうしていいのかわからないと思うような状態に陥ったことがあるだろうと思います。その時に私たちはみな同じように希望を失います。そのような経験はありませんか？私たちの心は沈み、私たちがもっていたはずのすべての希望は消え去ってしまいます。もう進んで行くことができないう。進みたいと思う気持ちさえ失ってしまい、私たちは暗やみの中に取り残されているかのように、そこに留まってしまいうこと、きっとそのような経験をされた方がいらっしゃるだろうと思います。

東北地方に行つて気づいたことは、至る所に「頑張れ!!東日本!!」という、そのような標識があることです。それはその地方ごとの表現で同じ内容のことが記されています。それを目にしている人たちの中で何人かの方々は、「私はそれが嫌いなのです。」と同じように口を揃えて言われます。震災後百日を越えた今日に至るまでずっと、彼らは一生懸命何とか頑張つてやつて来たけれども、でも、どこにもこれから先に進んで行く方向が見えないではありませんか？一生懸命やつていないなら「頑張れ！」でいいかもしれないけれども、これだけ一生懸命やつて来て先に進む術がないときに、そのことばを見るのは辛い、いやだと言われるのです。もちろん、私たちは悪気があつて「頑張れ！」と言うのではありません。その標語自体が悪いのではありません。

何が問題なのでしょう？私たちはそのことばによって人々を励まそうとするのです。「頑張らましよう！」と。でも、励まされる側にとっては、そのことばが励ましになっていないのです。そのことばを使うことが間違っているのではありません。でももし、そこに励ましが無いとするなら、その人たちはそのことばを聞いても、「頑張れ！」と言われても、「何々をしましよう！」と言われても、「これで良くなるのですよ！」と言われても、そこに希望を見出すことができないうのです。励ましが無いから、慰めが無いからです。だから、とやう訳ではありませんが、私たちはここ最近、何度となく被災地での自殺者の話を聞きます。被災された方々が、今置かれている状況に絶望して自らのちを絶つのです。年老いた方が自らのちを絶つたことを、聞いて見て読んで知つたときに、ある方がこのやうにおつやうしていました。「戦争を乗り越えて、貧困を乗り越えて、様々な苦勞を乗り越えて、この地震も津波も生き延びて、このやうに生きてきたのに、どうして自分でいのちを絶つてしまうのでしょうか？」と。

なぜでしょう？希望が無いからです。先に進んで行く理由が見つからないからです。なぜ、生きる機会が与えられているのに、これだけ多くの人たちがいのちを失つていった中で生きる機会が与えられているのに、どうして、その人たちは自らのちを絶つとやうするのでしょうか？その人たちにはきっと希望がなかったのでしょうか？そう思いませんか？

☆ 神の民の特権：困難の中で神のみことばを通して、励ましと希望が与えられる

私たちも同じだと思いませんか？絶望を抱かせるそのやうな状況を私たちが抱えるとき、私たちも同じやうに慰めのことばを見つけることができず、励ましのことばを聞くことができずに、絶望の中で嘆き悲しみ打ち沈み続けるのです。皆さんはそのやうなときにどうしていますか？皆さんはどのやうにして希望を見つけますか？もしかすると、皆さんは周りにそのやうな問題を抱えている方を知っているかもしれません。どのやうなことばをかけますか？どのやうに慰めますか？どのやうに励ましますか？

今日は皆さんといっしょに、詩篇119篇の49-56節の箇所を見ていきます。私はここに解答が

あると確信しています。この詩篇の著者はまさに、死の陰の谷を歩いていました。彼の人生には辛く、苦しいことが起こっていました。彼の周りには敵がたくさんいて、彼を嘲り、彼を愚弄し、彼を迫害し、彼のいのちを奪おうと計画を立てていたのです。そのような彼の人生の中でも最も暗黒と言えるような、最も困難なその時に、彼は励ましと、そして、それゆえに希望を見出すのです。そして、その希望は彼の内側から自然に湧き上がったものではありませんでした。その希望は、天におられる神が与えてくださったものです。神のみことばが私たちにその希望を与えると、この著者は私たちに訴えるのです。神の真理のことばが、私たちの心を励まし、私たちが絶望だと思っているところで、全く抜け出すことができない困難な場所にいると思っている中であっても、希望を見出し、私たちを前進させていく原動力になると言うのです。

今日ここに、そのような問題を抱えておられる方がいらっしゃるのを私は知っています。今日ここに、目の前に一切光が見えないと思われる方がいらっしゃるのも知っています。ここにいらっしゃる方たちの周りにこのような人たちがいることも知っています。今日、皆さんにぜひ理解していただきたいこと、そして、はっきりと確信を持っていただきたいことは、皆さんは励ましを持っている、皆さんは希望を持っているということです。皆さんはどんな暗黒の中にあっても光を見続けることができるのです。そこに向かって歩みを進めていくことができるのです。それを詩篇の著者は私たちに教えてくれます。神が愛してくださっているその民が、神のみことばを通して励ましが与えられ、その中に希望を見出すことができることを聖書は教えてくれます。それが神の民の特権なのです。

☆神のみことばが私たちにもたらすこと

みことばを読みましょう。著者はこのように言います。詩篇 119 篇 49-56 節

:49 どうか、あなたのしもべへのみことばを思い出してください。あなたは私がそれを待ち望むようになさいました。

:50 これこそ悩みのときの私の慰め。まことに、みことばは私を生かします。

:51 高ぶる者どもは、ひどく私をあざけりました。しかし私は、あなたのみおしえからそれませんでした。

:52 主よ。私は、あなたのとこしえからの定めを思い出し、慰めを得ました。

:53 あなたのみおしえを捨てる悪者どものために、激しい怒りが私を捕えます。

:54 あなたのおきては、私の旅の家では、私の歌となりました。

:55 主よ。私は、夜には、あなたの御名を思い出し、また、あなたのみおしえを守っています。

:56 これこそ、私のものです。私があなたの戒めを守っているからです。

この 8 節を三つに区分します。神のみことばが私たちにもたらすことは何かということを考えます。

1. 神のみことばは、沈みきったたましいに活力を与える。

2. 神のみことばは、困難の中にあるたましいに正しい応答をもたらす。

押し負かされそうになっている辛く苦しんでいるたましいが、主の前に正しい応答ができるようになるのです。

3. 神のみことばは、揺れ動き落ち着くことのない不安定なたましいに平安、落ち着きをもたらす。

この 49 節から 56 節は、119 篇の 7 番目の区分に当たりますが、この詩文節はヘブライ語のアルファベットの「ザイン」という文字ですべての節が始まります。

A. 神のみことばは、沈みきったたましいに活力を与える 49-50 節

実は、この 8 節の詩文節には「祈りのことば」が一箇所しか出て来ません。それが 49 節に記されています。そして、この一つの祈りが、この後続く七つの節すべてを支配するようなものです。「神のみことばは沈みきったたましいに活力を与えます。」、なぜなら、このみことばこそが、私たちに真の励ましを与えるものだからです。本当の励ましは神のみことばに基づくものだと言います。

1) 神は約束を守られる方だから

49 節の祈りを見てください。このように記されています。「どうか、あなたのしもべへのみことばを思い出してください。あなたは私がそれを待ち望むようになさいました。」。ここを見たときに、私が最初に気付いたことは、この著者は新しいことばを神に求めていないということです。新しい約束を神にして欲しいと思っているのではないのです。彼が言うことは「以前、あなたが私にしてくれた約束を思い出してください。」ということです。状況がいろいろ変わって行く中で、私たちはその状況にふさわしい対応を神に求めるかもしれませんが、彼が求めたことは「あなたが今まで言って来た事柄に目を向けてください。」ということです。神に「思い出してください」と言ったときに、著者が神が物忘れをするお方であると思っていたわけではありません。ここで言わんとしていることは「どうぞ、あなたの約束通りにそれを為してください。」、「今置かれているこの状況にあなたが目を向けてください。」という意味があるのです。「どうぞ、その通り、あなたが言った通りにしてください。」と言っているのです。

私たちは神がしもべに対して与えたことばが、この著者に直接的に語ったことばなのか、それとも、みことばの中に記されている数多くの約束なのか、そのことをはっきりと知ることはできません。けれども間違いのないことは、この著者は神が私たちに示してくださった約束、神に仕える者たちに与えると言われたそのことば、その約束を、神に今このときに是非為してくださいと訴えていることです。

皆さん、この詩篇の著者は神が自分がされた約束を守るか守らないかはっきりと分からなかったので、「どうか神さま、お願いだから破らないで守ってください。」とお願いしていると思いますか？著者は、ひょっとすると神は約束を成就してくれないのではないかという疑いのもとに、「神さま、どうぞ思い出してください。」と言っていると思いますか？明らかに、違いますね。事実、「あなたは私がそれを待ち望むようになさいました。」と書かれています。これは興味深い表現だと思いませんか？「私はそれを待ち望みます。」とは言いません。「あなたは」、つまり、神は私がそれを待ち望むようにすると言うのです。神がその約束を私たちがそれを待ち望みたいのだと思うようにしてくれると言うのです。このように希望を持って、神が守ってくださいという確信を与えるのも神の働きだと言うのです。そして、それを私は持っているから「どうぞ、その通りにしてください。」と言うのです。彼は疑っていたわけではありません。彼は確信を持っていたのです。神が約束を守られる方だということを、これまでのことを通して、聖書の歴史を通して、自分自身の個人の歴史を通して、それを見て取ることができるゆえに、彼は「私は待ち望みます」と言うのです。「なぜなら、あなたを信頼しているから。あなたがその働きを私の内にしてくれて、私はあなたの約束に信頼を置くから、どうぞ思い出してください。今、それをしてください。」と。

スポルジョンはここで非常に興味深いことを言います。イギリスの説教者の一人で、非常に優秀な神に用いられた説教者であったスポルジョンは、この箇所からこのように言います。「詩篇の著者は、私のあなたに対する奉仕を思い出してくださいとは言わずに、あなたのことばを思い出してくださいと言っている。」と。皆さん、私たちは余りにも多くの時に「神さま、私はこれをしたからどうぞこのようにしてください。私はこんな頑張っているから、どうぞ、その働きを思い出してください。あなたに熱心に仕え続けて来たではありませんか？どうして、あなたはそれをしてくれないのですか？」と、私たちが何かをしたから、神がまるで良いことをしてくれるかのように…。

皆さん、よく考えてください。私たちがどれだけ良いことをしたとしても、どれだけ良い人物であったとしても、神は私たちに何か負債を負っている訳ではないのです。「いい人だから、私はあなたにこれをしなければいけない」とは言わないのです。私たちは神の前に正しく生きるべきです。私たちは神に従順に仕えるべきです。でも、仕えたからと言っても、どんなにいい人物であり続けたからとしても、神が私たちに「それは良かった。あなたに褒美を与えよう。」という必要は一切ないのです。詩篇の著者はそのことをよく分かっていたのです。彼は忠実に生きました。だから、迫害を受けたのです。常に、神に喜ばれる選択をしようとしてました。だから、周りの人たちはみな、彼のことが憎かったのです。でも、それが問題だったのではないのです。彼は自分がどれ程すばらしい人間かということに期待したわけではありません。そして、それに対して神がどのように報いてくれるのかに期待したのではなくて、神が語ったことばは、神は真実な方だから、誠実な方だから、必ず守り続けてくださるといふ、そのことに信頼を置いたのです。神の約束が私たちを励ますのです。神の約束が私たちを前へと進ませるのです。

2) 神は真の励ましをくださるから

それだけではありません。真の励ましは、私たちが抱えているあらゆる悩み、あらゆる問題に打ち勝つものなのです。真の励ましは、どのような問題の中にあっても、私たちの心を動かし、私たちを前へと突き進めるものなのです。そのことが50節に書かれています。「これこそ悩みのときの私の慰め。まことに、みことばは私を生かします。」、このような困難の中で著者は慰めを見出したのです。ここで「慰め」と訳されていることばは「励まし」ということができます。むしろ、どちらかと言うと「励まし」と訳した方が正確でしょう。ここで言わんとしていることは、神が私たちの問題を見て「ああ…可哀想に！」と慰めてくださっている姿ではないのです。その問題に対して具体的に、私たちがどのように立ち向かい、どのように前に進んで行くのかを助けてくれるその励ましのことです。みことばがそれをしてくれると言うのです。

また、ここで訳されている「みことば」ということばは、前にも何度か出て来ましたが、「約束」と訳すことが出来ることばです。つまり、彼は神が与えてくださった「約束」を思い出したのです。そして、それは彼を内側から生かすのです。萎え切っていたたましいに力を与えるのです。もう動くことができない、もうどうしようもないと言って落ち込んでいるその心に力を与えるのです。再び立ち上がって、一步一步歩みを進めていくための力を備えるのです。これまでも見て来たように、神はこの約束を成就していませんでした。だから、彼はまだ苦しんでいたのです。まだ悩みの中にいたのです。周りは

敵だらけだったです。人々は彼を嘲り陥れようと計画を立てていたのです。彼のいのちを奪おうとまでしていたのです。その中であって彼は言うのです。「私の心はいきいきとする。活力が与えられる。沈み続けるのではない。」と。神の誠実さに対する信頼をここでも見て取ることができます。

だから、どのような困難、危険の中にあっても彼は慰めを見出すのです。励ましを見つけることができるのです。

3) 神はすべての励ましの神

パウロも同じことを言いました。Ⅱコリント1：3-4でパウロはこのようにことばをコリントの人たちに対して記しています。「私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。4 神は、どのような苦しみのときにも、私たちに慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができます。」、この箇所から3回位のメッセージができそうですが、よく見てください。私たちの神はどのような神ですか？「すべての慰めの神」だと言います。この「慰め」と訳されていることばは「励まし」ということができることばで、実際に、詩篇119：50の「慰め」、ヘブライ語をギリシャ語訳にした70人訳聖書で使っている同じことばです。パウロは言います。「私たちの神はあらゆる励ましの神だ。すべての励まし、慰めの神だ。」と。

そして、その神は私たちに何をしてくれるのですか？「どのような苦しみのときにも、私たちに慰めてくださいます。」とあります。クリスチャンの皆さん、知っていましたか？皆さんにはどのような苦しみの中でも、悲しみの中でも、困難の中でも、危険の中でも、慰めと励ましがあるのです。私たちの神はすべての励ましの神だからです。しかも、私たちはこのように神から慰め、励ましを受けるのですが、その受けた励ましのゆえに、「私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができます。」。皆さん、励ますことができますか？皆さんは何をもって励まそうとしますか？

神は私たちに慰めてくださいます。神は私を励ましてくださいます。どんな苦しみ、悲しみの中にも、悩み、苦難の中にあっても、神は私たちに励まし慰め続けてくれます。なぜなら、すべての慰めをもっておられる方だからです。ありとあらゆる状況の中で、私たちに励まし私たちに希望を与えることができるお方だからです。皆さん、ご存じでしたか？私たちの神がすべての慰めの神であることを。スボルジョンはこのように言いました。「世俗的な人たちはお金の束を握りしめて、これが私の慰めだと言う。浪費家たちはきらびやかな彼らが身につけているものを指さして、これが私の慰めですと言う。飲んだくれはグラスを上げて、これが私の慰めだと言う。けれども、希望が神からのみ来ることをよく分かっている人物は、みことばの力を通して本当の励ましがやって来ることを知っている人物は、神のみことばをもって、これが私の岩だ、これが私の励ましだと言う。」と。

皆さん、どこに励ましを求めますか？皆さんはどこにそれを捜しますか？いったい、だれのところに、皆さんは慰められに行きますか？どんなことばを皆さんは聞きたいですか？あらゆる状況の中で、皆さんに活力を与えるのは何ですか？皆さんが先に進んでいくための力を得る、その原動力は何ですか？クリスチャンの皆さん、皆さんが行くべきところは一つしかありません。すべての慰めの神のところ。あらゆる悩みの中にあっても、苦しみの中にあっても、皆さんを励まし、皆さんに希望を与えることができる神だけです。あらゆることが上手く行かないと思っている中で希望を与えることができるのは、私たちの神が語るのみことばだけです。あらゆる希望を失うときに、その希望を再び私たちに見せてくれるのは、神のみことばだけです。神は言います。「わたしを愛する者にわたしは最善を施す。わたしを愛する者をわたしは愛する。彼らを祝す。」と、詩篇の著者はそのことを知っていたのです。

B. 神のみことばは、困難の中にあるたましいに正しい応答をもたらす 51-53節

神のみことばは、沈んでいるたましいに活力を与えるだけでなく、神のみことばは、虐げられているたましいに正しい応答を与えます。そのことが51-53節に記されています

1) 神のみことばを反映する応答 51節

いったい、何が彼に悩みを与えたのでしょうか？その具体的な内容が51節に記されています。それは「高ぶる者たちの嘲り」だったのです。そして、そのような状況の中にあっても彼がどのように応答いったのが記されています。51節を見てください。私たちはそこに、彼の正しい応答は神のみことばを反映するものであることを見ることができます。「高ぶる者どもは、ひどく私をあざけりました。しかし私は、あなたのみおしえからそれませんでした。」、「高ぶる者」とは、神を神とせず、自分たちの思う通りに生きることを願い、一生懸命自分たちの思うその知恵に沿って生き続け、神の知恵を拒絶し、神からの戒めを受けても立ち帰ることをしない者たちのことです。

彼らはこの著者をひどく嘲りました。なぜなら、この著者が神に喜ばれるように生きようとしていたからです。そのような者たちが彼の周りを取り囲み、彼が生きているその生き方を否定し、非難し、嘲るときに、皆さんならどうしますか？私はその場に自分を置いたときに、二つの応答があると思いました。一つは、周りの人たちがみな、私のやっていることを見て嘲り、非難し、私のことを否定しようとするから、私は自分の生きている生き方を妥協して、彼らの言っていることに合わせようとする。そのような応答はありませんか？もう一つは、妥協する代わりに、彼らのしている悪に憤りを覚えて、悪をもって悪に報いようとするのです。「あんなひどいことをする人たちだからこれが相応しい。」と。

けれども、詩篇の著者の応答はそうではありませんでした。「私は、あなたのみおしえからそれませんでした。」と、彼は妥協することも、悪をもって報いることもしなかったのです。彼が願ったことは、神が求めることをどのような状況の中でも私はやっつけようとするのでした。神に忠実な道を、神のみことばから逸れることなく生きていこうとしたのです。皆さん、落胆しているたましいがそのようなことができると思いますか？虐げられてどうしようもないと思っているたましい、希望を見出すことができない励ましのないたましいが、そのような選択をすることができると思いますか？でも、彼はしたのです。なぜなら、彼には励ましがあつたから、彼には希望があつたからです。どのような虐げ、どのような嘲りがあつても、どのような危険がそこに待っていたとしても、「私は私が知っている正しい道を歩み続ける。」と言うのです。そこには正しい応答がありました。

2) 正しい応答は慰めを与える 52節

また、彼がその道を歩み続けようとしただけでなく、この正しい応答を持つことによって、それが与えられることによって、それを生きようとすることによって、彼はあらゆるプレッシャーから解放されるのです。52節「主よ。私は、あなたのとこしえからの定めを思い出し、慰めを得ました。」と、彼はそのように言います。いったい、どうすればそのように嘲る者たちがたくさんいる中で、自分の道を妥協しないで、悪をもって報いることをしないで、正しい道を真っ直ぐに進み続けることが出来たのかと言うと、それは彼が神の定めをよく理解し、そこに慰めを見出したからです。

皆さん、時代劇があります。ご覧になったことがあるでしょうか？毎週毎週、同じ番組が放映されます。毎週、必ず、話は違います。登場人物、行く町、起こる問題が違います。しかし、1時間の番組の後半、45分位経ったところで、どのような結末が待っているかが分かるのです。いや実際のところ、そのドラマを見る最初から、結末がどうなるのかを知っているのです。詩篇の著者が言っていることは、まさにそうです。彼が言うのは「私はあることを思い出します。それは、神がとこしえから定めていることです。」と、ここで「定め」と訳されていることばは、実際には、「さばき」ということばが使われています。つまり、彼は「とこしえからのさばきを思い出す。」と言っているのです。

何を思い出したのでしょうか？彼が思い出したのは、アダムとエバがエデンの園で罪を犯したとき、神が何をなされたのかを思い出したのです。カインとアベルが、神の前にささげ物を捧げて、カインが兄弟を殺したときに、神が何をなされたのかを思い出したのです。ノアの時代に、神が心の中に計るすべてのことが悪である者たちに対して、どのようなさばきをなされたのかを思い出したのです。そして、同時に、ノアに対してどんなさばきを与えたのか？ノアを義と認め助けたことを彼は思い出したのです。自分の生涯を振り返って、神が成して来られた一つひとつの良いわざを思い出したのです。

皆さん、思いませんか？私たちは時代劇を見ていて残り15分位になると、ふとところから印籠が飛び出し、桜吹雪が舞います。だから、安心して見ていられるのです。必ず、その結末が起こることを私たちは知っているのです。皆さん、よく覚えてください。神は悪をさばかずに時間切れになる方でしょうか？神は終わりに必ず正しいことをなさいますか？神の定めは、良い者を祝福し悪い者をのろう定めではありませんか？詩篇の著者はそのことを思い巡らしたのです。思い出したのです。そして、「慰めを得ました。」、慰めを得たのです。ここで興味深いことがあります。「慰めを得た」と言うとき少し分かりにくいのですが、実際にここは「私は私を慰めた」と書かれています。自分で自分を慰めているのです。良く考えてください。いつも私たちの周りには、私たち慰めてくれる人たちが溢れているのでしょうか？私たちが困難を覚えているときは、どちらかと言うと私たちは孤独ではありませんか？自分一人でこの戦いを戦わないといけなければいけないと思っていませんか？私たちが絶望しているときは、周りの人だれもが私の抱えている問題を理解してくれないと思っていませんか？だれ一人として、私の立場を、私の思いを、私の悲しみを理解してくれないと…。

泣きつくことができる肩を捜してもどこにもいないのです。だれも横にいないから、だれも自分を抱えて肩をたたいて「大丈夫だよ！」と言ってくれないのです。寂しいときに「どうぞ、私に声をかけてください。」とお願いしても、だれも答えてくれないのです。そんなことはありませんか？皆さんよく考えてください。詩篇の著者の周りにはそのような人がいたでしょうか？高ぶる者が彼をひどくあざけ

っているときに、彼の周りにはいつでも相談に乗ってくれて、励まし慰めてくれる人がいたでしょう？でも、彼は言うのです。「私は自分を慰めることができる。」と。「ああ、おまえは何と立派な人物だ、良くやった！」と言って、自分の肩をたたくことではありません。そのようなことではありません。

では、なぜ、彼が自分を慰めることができるのか、彼は神のみことばを知っているからです。神が定めた定めが何なのかをよく分かっているからです。もしかすると、皆さんの中で孤独感を覚えておられる方がいらっしゃるかもしれません。近くに友だちがいなくて、だれも慰めてくれる人がいないと思っ

ていらっしゃる方がいるかもしれません。けれども、聖書は言います。「自分を慰めることができる」と。すべての慰めの神は、あらゆるどのような苦しみのときにも私たちを慰めることができる方です。その神が私たちに、みことばを通して、自ら悲しみに沈むとき、苦しみに置かれているとき、希望を見出すことができないときに、励ましを与えてくれると言われるのです。

プレッシャーから解放されませんか？一人で思い悩んでいると思う必要はないのです。神は分かっ

ておられるし、その神はみことばを通して、正しい解決を教えてくれるからです。

3) 神の思いを反映する応答 53節

それだけではありません。53節を見てください。非常に不思議なことばが書かれてあると思われるかもしれません。「あなたのみおしえを捨てる悪者どものために、激しい怒りが私を捕えます。」と、何のことでしょう？私はどんな嘲りの中にあっても、どんな状況の中にあっても、あなたの道を逸れずに歩んで行きますと、彼は最初に言いました。その道をよく知っているゆえに、その道に、そのために思いを巡らしたときに、私の心には慰めが与えられると言います。必ず、さばきが起こるのを知っているからです。必ず、神が神に仕える者たちに称賛を与え、神を憎む者たちにのろいを与えることを知っているからです。

内側には、慰め、安らぎ、励まし、希望が起こります。同時に、それが余りにも力強く起こるゆえに、彼は神が敵に対して思っているのと同じ思いを抱くようになるのです。神の思いを反映させるのです。正しい応答とは、神の思いを反映させるものです。だから、悪者に対して彼は怒ったのです。「激しい怒りが私を捕えます。」と、この「激しい怒り」と訳されていることばは、旧約聖書の中に3回しか出て来ない非常に珍しいことばです。実際に、このことばは「燃えさかる熱、非常に激しい熱」のことです。砂嵐とか、干ばつの時に起こっている非常に熱い状況のことを実際に指して使われることばです。ここでは明らかに、彼の怒り指して比喩的に使われています。それがどれ程熱く燃えたる激しい怒りだったのかを見て取ることができます。それが「私を捕えます。」と言うのです。この「捕らえる」ということばも非常に興味深いことばです。出産、子を産むその最中にある母親たちが痛みを経験します。ここにおられる多くの女性の皆さんはその経験をなさいました。皆さん、痛みには捕えられませんでしたか？他のことなど考えることができなくなりませんでしたか？痛みだけが自分のすべてを支配しているかのような錯覚に陥りませんでしたか？そのことがここで言っていることです。つまり、著者は激しい怒りに支配され、捕えられていたのです。

でも、何に対して怒っているのでしょうか？良く考えてください。「あなたのみおしえを捨てる悪者どものために」怒りに捕らわれていると言います。「私のことを迫害する人たちに」とは言っていない。彼らが神を神とせず、神のみことばをしっかりと聞いてそれに聞き従っていこうとする姿勢が全くなく、それを拒絶し神に逆らう選択をし続けるから、彼は怒っているのです。怒りの方向が違わないと思いませんか？彼は自分のことはどうでも良かったのです。自分がどのような仕打ちを受けているのかなどは問題ではなかったのです。なぜなら、神が必ず最後にさばいてくれるのを知っているからです。「とこしえからのさばきを私は覚えている。思い出す。」と言うのです。でも、赦せなかったことは、悪者どもが神の定めを定めとせず、神の命令を命令とせず、神に逆らって生き続けるその姿勢です。著者は神と同じ思いを抱いたのです。神と同じように考えたのです。

皆さん、「罪を憎んで人を憎まず」と言うではないですか？神は罪を憎むだけでなく罪人も憎まれることを知っておられますか？詩篇5：5にこのようなことばが記されています。ダビデはこのように言います。「誇り高ぶる者たちは御目の前に立つことはできません。あなたは不法を行なうすべての者を憎まれます。」と。神は不法を行なうすべての者を憎むのです。そして、神のさばきを思い巡らし、神が教えるその道をまっすぐに歩んで行こうとする者たちには、神が憎む者たちに対する憎しみが生まれるのです。皆さんテレビを見ていて怒りに支配されることがありませんか？そこに映っている映像が、そこに出演している人たちが、神が定めた定めとは全く違うことを、まるで面白可笑しいかのように生きている姿を見ると。それとも、皆さんは世の中の神のことを全く考えない人たちと同じようにそれを見て、同じように笑っていますか？どうですか？皆さんはどのような心を持っていますか？町を歩いていて、悪

がそこに露わに現われているとき、神が望まない事柄がそこに示されているときに、それを見て皆さんは憤りを覚えますか？「主よ。どうぞこの町を変えてください!」と思いますか？

詩篇の著者は思ったのです。なぜなら、彼は神からの慰めを通して、神からの励ましによって、困難の中で神を覚え続けることを知り、希望をもって前に進んで行くことを知ったから、神の望む道を歩み、神のさばきを確認し、主と同じ思いを持つようになったからです。

神のみことばは、虐げられているたましいにこのような働きをされるのです。

C. 神のみことばは、揺れ動き落ち着くことのない不安定なたましいに落ち着きをもたらす

54-56節

1) 神のおきてを思うことによって

神のみことばは、沈んでいるたましいに活力を与えるだけでなく、虐げられているたましいに正しい応答を生ませるだけでなく、三番目に、神のみことばは、不安定で揺れ動き落ち着くことのない、そのようなたましいに平安を与えるのです。安らぎ、落ち着きを与えるのです。そのことが54-56節に記されています。著者は言います。54節「あなたのおきては、私の旅の家では、私の歌となりました。」このことばを見て、思わず笑みが浮かびませんか？いろいろな問題があって先が見えない、そこにどのような解決があるのか分からない、どこを見ても真っ暗闇でしかない。このようなときは不安です。心騒ぎます。どうすれば良いのか…と思います。「光はどこにあるのですか。いったい、このトンネルはどこまで続くのですか？」と、前を見ても後ろを見ても真っ暗です。このままで大丈夫なのかと心が騒ぎます。だから、人々は希望を失い、励ましのことばを見出すことなく、慰められることなく、沈んでしまうのです。

でも、詩篇の著者は違いました。神を見上げて、神のみことばを通して励ましが与えられ、希望が生み出されたのです。「あなたのおきては、私の旅の家では、私の歌となりました。」、「旅の家」とは何のことでしょうか？彼はどこにいても寄留者だということです。ちょうど、アブラハムとその子孫たちが、ヘブル人への手紙11章に記されているように、この地上での生活が寄留者のようなものであることを知って、天にある神の都を求めて生きたのと同じように、著者もこの地上でも生活が安住の場所ではないことを知っていたのです。「旅の家」だったのです。どこに行ってもゆっくりと安らぐことができないことを知っていたのです。でも、神のおきて、神の命令、神のみことばは「私の歌となりました。」と彼は言います。皆さん、彼の旅路は安易なものではありませんでした。間違いなく、楽ではなかったのです。鼻歌まじりに歩くことができるような、そんな朗らかな楽な旅路ではなかったのです。でも、彼の口から出て来たのはため息ではなく「歌」だったのです。しかも、その歌はブルースではなかったのです。悲哀の歌でも嘆きの歌でもなかったのです。彼の口から出て来たのは「喜びの歌」だったのです。「歌」と訳されているこのことばの語源を旧約聖書の中に辿って行くと、そのことが分かります。彼は喜びの歌を歌っていたのです。

皆さん思い出しませんか？使徒の働き16章に記されています。パウロとシラスがピリピの町で働きをしていました。彼らはある争いに巻き込まれ、暴動の主犯者として捕えられ、むち打たれ、ローマ市民でありながら、本来は市民には相応しくないこと、いや、そのようにしてはいけなと言われる牢獄の一番奥の部屋に入れられて、足かせを着けられて閉じ込められたのです。彼らは激しくむち打たれて、その痛みの中で嘆きましたか？不満を漏らしましたか？彼らの口から出て来たのはため息ばかりでしたか？「ああ…どうしてこんな目に会うのだろう？」と。そうではありませんね。彼らはその牢獄の中で、痛みと戦いながら、神に祈り、賛美していたのです。なぜ、そのようなことができるのですか？彼らには慰めがあったからです。彼らには励ましがあったのです。神が何をなさる方なのかをよく分かっていたのです。神が与えてくださっている一つひとつの事柄を、彼らは感謝して受けることができたのです。なぜなら、彼らの目は今起こっている状況だけに向くのではなくて、それ以上に、神が語っておられる真理に向かっていたからです。

神のみことばは私たちの心を喜ばせます。そして、私たちは主に「喜びの歌」を歌います。なぜなら、神に希望があるではないですか！神に励ましがあるではないですか！神に慰めがあるではないですか！

2) 神の御名を思うことによって

最後に詩篇の著者はこのように言って終わります。55-56節「主よ。私は、夜には、あなたの御名を思い出し、また、あなたのみおしえを守っています。:56 これこそ、私のものです。私があるあなたの戒めを守っているからです。」。不安定になっている心が、そのたましいがどのように平安を取り戻すのか？落ち着きを取り戻すのか？神に思いを巡らすときに、神のことを深く考えるときに、それは私たちの心を正すのです。私たちの心を教え、さとするのです。それが、著者が言わんとしていることです。

「私は、夜には、あなたの御名を思い出し、」とあります。なぜ、夜なのでしょう？皆さん、経験ありま

せんか？苦しくて、辛くて、困難で、どうして良いのか分からないときに、皆さん、ぐっすりと眠れますか？どれだけ疲れていても、どれ程眠りたいと思っても、皆さんの目は開いていませんか？皆さんの頭は走り続けていませんか？いろんなことに思いが向きませんか？「私は、夜には、」と、真っ暗闇です。彼はいろんなことに頭が動き、思いが飛んでゆくその中で「いや、私はこのことを思い出す。」と言うのです。「あなたの御名を思い出すのです」と。これは決して、聖書の中で神がどんな名前で呼ばれているのかを一つひとつ数えてゆくことではありません。「羊が一匹、二匹…」ということでもありません。ここで思い巡らしたこと、思い出したことは、神がだれで、神がどのような性質をもっておられて、神がどのように人々の間で知られて来たのかということなのです。

神はどのようなお方ですか？神は愛ある方です。神は助け主であり、全知全能な方で、主権者であり、神はご自身の栄光のために、私たちに最善をなすお方です。このように一つひとつの神のすばらしさ、神の特徴を、イスラエルの歴史においてこれまでどのように知られて来たのか、彼はそのことを思い出したのです。エジプトから出て来たときに何が起こりましたか？食べ物がないときに何が与えられましたか？皆さん、思い出せますか？神がどれ程皆さんにとってすばらしいことをなしてくださったかということ？救われてから今までの個人の生活の中であって、神がどれ程すばらしい恵みを溢れんばかりに与えてくださったかを彼は思い出すのです。

3) 自分の分を知ることによって

そして、そのように思い出したときに、彼は何をしたのか？決意を新たにしたのです。「あなたのみおしえを守ります」と言ったのです。「守っています。」、この箇所は「守って生きて」と、そのように訳すことが出来ます。彼はどのようにして生きて行くのかと問われたときに、いろんな選択がありましたが、「私は神をよく知っているから、私が生きて行く方向は一つしかない。あなたのみおしえを守る生き方です。」と言うのです。「これこそ、私のものです。」とありますが、新改訳聖書では「守っているからです。」と理由であるかのように書かれていますが、この部分は実は「これこそ」が何であるのかを言い表わしているのです。50節で「私の慰め」が「みことば」であったのと同じように、この箇所も同じように訳すべきなのです。

つまり、私は神のすばらしさを思い巡らしました。神がどんな方なのかを知っています。神が私のために最善をなし、計画をもって私を守り導き助けることを知っているから、私が今置かれているこの状況の中で、私の分として持っていることは、神に信頼を置いて、あなたの戒めを守って生きていくこと、それが「私のものです。」と言うのです。次回、見て行きますが、57節からそれが続きます。「主は私の受ける分です。」とあります。今置かれているその状況の中で、彼が何を持っているのかを彼は告白しているのです。でも、ここで著者が私たちに教えることは、神に深く思いを巡らすときに、神がどんな方なのかを知っていくときに、私たちは益々その思い正されて、主に対してより従順に生きて行くようになるということです。そのように決意していくと言うのです。そのようにして行くときに、私たちの心は励まされます。なぜなら、結末を知っているからです。どれ程大きな助けがすでにあることを分かっているからです。絶望だと思っているところに、希望がないと思っているところに、希望を見出すことができるのです。それがこの著者が私たちにここで教えてくれることです。

希望がないということは辛いことではありませんか？皆さんがどれ位の深い絶望を感じたことがあるか、私には分かりません。でも、少なくとも、希望のない生き方を生き続けること、その人生を歩み続けることは、余りにも辛く、苦しいことだと私は知っています。絶望は私たちに内側から殺します。私たちが深く沈め、私たちが前進していく力を奪い取っていきます。私たちの人生には、ときに、私たちが予期しないことがたくさん起こります。どのように対応していいのかわからないことが起こるのです。緑の牧場を歩いていると思ったら、角を曲がると、いきなり、死の陰の谷が待っているのです。私たちはひよっとすると強制的にそこに投げ込まれることがあるかもしれません。そのようなとき、私たちは落ち込み、悲しみ、どうしていいのかわからない中で悩み続けます。涙を流すでしょう。眠れない日々が続くでしょう。ひよっとすると、皆さんは自分でいのちを絶ってしまいたいと思ったことがあるかもしれません。

けれども、そのような皆さんの人生の中で、最も暗黒だと思われるようなそのときに、皆さんがどこにも励ましも慰めも希望も見出すことができないようなそのときに、皆さんに希望を与えるところがあります。皆さんに励ましを与える方がいらっしゃるのです。すべての慰めの神は、あらゆる苦しみの中において、私たちに十分に慰め、励まし、希望を与えることができる方です。

私はいつも、いろいろな方とお話するときに、何と役に立たない者だろうと思います。いろんな悩みを聞きます。相談に来られて慰めが必要な場合がたくさんあります。でも、慰められないのです。なぜなら、彼らの苦しみが分からないからです。彼らがどれ程、困難の中で絶望しているのかを見ることが

できないからです。どのようなことばをかけても、その悲しみを取り除くことが十分でないのを知っているからです。自分がそれを代わりに受けることができれば、と思うことが多くあります。そのように取り除いてあげることができればどれ程いいかと思うことがあります。でも、それもできないことがよく分かっているから、ときにいっしょに泣き、ときにいっしょに沈黙し、その沈黙の中で祈り続けることしかできない場合がたくさんあるのです。

でも、一つだけ分かっていることがあります。たとえ、私が彼らに相応しいことばを見いだすことができなかつたとしても、神はその人に対して希望を与えることができるということです。神のみことばは、その人を心から励ますことができるのです。彼らは再び立ち上がって、困難の中にあっても力を受けて歩み続けることができるのです。「しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」（イザヤ40：31）。

皆さん、神は私たちを助けてくださいます。神は私たちに励ましを与え、希望を与えてくださいます。もし、皆さんが絶望を経験しているなら、もし、皆さんがどうしようもないと思っている状況の中にいるなら、もし、皆さんが人生の困難の中で溺れてしまっているなら、どうぞ皆さん、神に叫んでください！神のみことばに耳を傾けてください！

神は希望を失っている人たちすべてに、溢れんばかりの希望を与えることができるのです。神だけが本当の希望だから。神だけがすべての慰めの神だから。